従姉と金責め夏休み２

玉子王子　著

一章　必殺スパッツ磨り潰し

　鈴木厳(ゲン)の家は元々地主で、広いものだった。

　夏休みには親戚が泊りに来たりする。

　する、というか現在従姉の三姉妹とその母が滞在中だ。

　厳は一〇歳ながら屋敷の離れで妹と二人で暮らしている。といっても部屋があり、寝るのがそちらというだけで基本的な生活は母屋であるが。

　離れといっても、普通の家より大きい。

　昔は職人が長期間仕事をしに来ることがあり、離れに泊まってもらうこともあったのかもしれない。

　そのため、風呂もトイレも完備されている。

　和風の平屋で、ほぼ畳敷き。

　その一室で、向き合う男女。

　厳と、同じ年の従妹であるミユコだ。

　広い部屋、真ん中に二人。

　少し離れて幼女二人。厳の妹と、ミユコの妹。二人とも七歳だ。

　従妹を前に、厳は苛立たしそうに……というか、実際のところはわずかに怯えつつ口を開く。

「相撲ってことは、禁止だからな」

「んー、なにが？」

　明らかにわかっている顔で、半笑いで首をかしげるミユコ。短いポニーテールが揺れる。

　顔を赤らめ、唇をかむ厳。畳を裸足で踏みしめる。

「だから……お前の大好きなアレだよ！」

「んー？」

「だから……」

「あ、お姉ちゃん」

　急に厳の斜め後ろを見るミユコ。吊られてそちらを見る厳。

「え？　はうっ！」

　ギュム、と正面から握るミユコ。腰を落とし、慣れた様子で手を前に伸ばして下から掬い上げるようにして厳の股間を握った。

　がっしりと、しかし優しく、慣れた手つきで従兄の自分にはない臓器を手の中に収める女児。

　びくりと震え、動きを止める厳。

　周りで黄色い声が上がる。

「きゃー！」

「ぎゃはははは！　お兄ちゃん握られちゃった！」

「厳お兄ちゃんのおキンキンゲット！」

手を叩き、唾を飛ばして飛び跳ねる幼女二人。お兄ちゃん、と呼んでいる肩までのショートカットがリアル妹のミキナ、厳お兄ちゃんと呼んでいるロングヘアが従姉でミユコの妹のアイミである。

二人とも、小柄も小柄、幼稚園に紛れ込んでも気づかれないぐらいの見た目だが、飛び跳ねる動きはやはり体も育ってきた小学生のものだった。

「ちょ……」

引きつった笑いを浮かべつつ従妹を見る厳。握りつつ、にんまりする従姉。

「あはは、必殺玉握りー。それじゃ、このままあんたの金の玉握り潰して相撲は私の勝ちと」

モミモミと玉の位置を探る女児の手に、つま先立ちの厳。

「ちょ、ちょ……相撲は、金的禁止！　大体、まだ始まってないし」

「あら、そうなんだー？　知らなかったわ。あんたたち、知ってた？　相撲じゃ、タマタマ攻撃無しって」

「しらなーい」

「私も。だってさ、私達って……ね、アイミちゃん」

「だよね、ミキナちゃん！　私達って……女の子だから……」

　顔を見合わせ、うなづき合う。

　そして兄の前に立ち、せーので動く。

「あっ」

　ペラーン、とスカートを掴んでめくり上げ、まっ平の股間を隠す幼女パンツを惜しげもなくさらす。平だが、しっかり形はある。ぴっちり閉じた縦筋が布越しでもはっきり分かる。

　スカートをめくり、腰を突き出しつつ、満面の笑みの幼女二人。

「女の子だから、弱点ボールがないもんねー！」

「だから金的に関するルールなんて興味ありませーん！」

「ぎゃははは！」

「厳お兄ちゃんたち、付いてる人には重要ルールだから印象に残るのかもしれないけど。私たちには全然どうでもいいルールだもんね」

「女のここは頑丈だから」

　パン、と兄と違ってまっ平の部分を掌で叩くミキナ。

「狙われたって平気だもんね」

「ねー」

「ねー」

　姉も調子を合わせる。

　付いてない者たちの結託に眉を顰める厳。

「なにが「ねー」だよ。いいから放せよクソマ〇コ……あ、ちょ」

「何がクソマ〇コよ。ほらほら、キ〇タマ握り、グリ、グリ、ぐりー！　ぐっちょー！　二個玉はれーつ！」

　目を見開き、顔を近づけつつ唾を飛ばすミユコ。恐ろしいことをいっているが、今のところは口だけで脅しをかけているに過ぎない。彼女の手の中の男の急所は優しく握られているだけだ。

　ただ、必要なら容赦などないことを厳はよく知っている。

　彼女が姉と妹とともに厳の家に泊まりに来て今日で四日目だが、軽い金的なら数知れず、意識が飛ぶほど強烈な物も数限りなく食らっている。

　ミユコは、金責め大好きドＳ女子だった。

　それは姉譲りであり、彼女ら二人の影響ですっかり二人の幼女も染まっている。

　考えるだけで、恐ろしくなる厳。

　――この離れにいる五人の人間のうち、キ〇タマという弱点があるのは俺だけ。残りの四人は女だから当然玉がない。だから自分が反撃されることを一切恐れず、好き勝手玉狙ってこれる。それも、必要なら狙うってレベルじゃない、こいつら玉責めが大好きなんだ。

　と、障子が開く。

　顔を出すのは四〇歳ぐらいのちょっととした美人。シャツと下着だけで包まれた巨乳に思わず目を取られる厳。

　三姉妹の母であり、厳とミキナの父の妹で旧姓鈴木、現町垣。

「キミハは……あら」

三姉妹の長女を探しに来て、厳たちがやっていることに気づく。というか、娘がやっていることに。

見て、子育て講座を思い出す。

それは町垣が長女が生まれる前、妊娠中に受けた講座だった。

同じ妊婦ばかりが集まり、講師も女性。

様々な注意点をホワイトボードに列挙していた。

乳児の時に調べればすぐにわかるし、治療すれば簡単に治るが、気づかないと障害が残ってしまう病気などもあるので、定期検診は絶対に欠かさないように、などという基礎知識である。

話が一段落したところで、ちょっと言いにくそうな、微妙に半笑いで講師が話し始める。

「えーっと、そのですね。子育て中に、子供が遊んでるとしますね。男の子と女の子。で、女の子がですね、その……男の子の大事なところ、タマタマちゃんを攻撃してたとしますね。その場合、どうするべきか」

ホワイトボードに人型を二つ描き、片方の股に丸を二つ描く。

「やだっ」

「体の大きさからしたら、大きいボールね」

クスクス笑い声が上がった。町垣もつい笑いそうになる。子供のころ、兄のを見ていても思ったが一物の方はなにか力強さのような物を感じないでもなかった。兄のが大きかったということもあるだろう。

大人になるとさらに強くそれを感じるようになった。

――でも、ついぞ感じたことないのよね。ボールくんに強さは。男性ホルモンを出して、男の人の強さを生み出してるってことがわかっても……どうもあの玉コロ君は弱くて、妙に笑える情けなさしか感じないのよね。

多分、周りの妊婦らも同じなのだろうと町垣は思った。

と、誰かが半笑いながら手を上げる。

「それって、喧嘩ってことですか？」

「もちろん喧嘩の場合もですが、遊びででもです。これは結構危ないことなんですね。なぜなら、女は……私も皆さんもですが、当然ついてないわけですよ。その……タマタマが。だから加減がわからない。ここだけの話、女の子と喧嘩して、タマタマに怪我する男の子って結構いるんですよ。流石に潰れることはほとんどないんですけど……。でも、怪我は結構ある。男の子同士なら絶対やらない力で、女の子は案外タマタマを攻撃しちゃうので」

だから遊びで急所攻撃をすることは絶対にやめさせねばならない。

とは、講師は言わない。

本来ならそういう話になるはずだが、この世界は現実の世界とは少し違った。

大体は現実世界と同じだが、ナノテクノロジーがかなり発達しており、怪我を簡単に治す薬がコンビニなどで安く売られているのだ。

腕が取れたり、頭が半分吹っ飛んでも、薬一粒ですぐに治る。

まして、睾丸などまさに秒で治るのだ。

「女の子はタマタマに加減ができないものなので、そういうことをする子がいる場合、何かあった時にすぐに治してあげられるようにナノ薬は常に持っておくようにしましょうね。タマタマの怪我は、

早く治してあげないとかわいそうですから。あ、まあどんな怪我でも同じですけど」

ナノ薬のあるなしで、「絶対しないように躾ける」べきことが「いざというときのために薬を用意しましょう」という話になる。

治るにしても、急所攻撃はやはり止めさせるように躾けるべきではないかとも思うが、そこはその場にいる者たちは自分に当該の急所がないものたちなので、所詮他人事なのだった。

ナノ薬がなければ、まともな人間なら「生殖能力を失いかねない危険な行為」を遊びでやらせないのは当然だ。

しかしナノ薬があれば、自分に睾丸がない者たちは「結局のところほかの場所よりちょっと痛いってだけでしょう」と考えてしまう。

「えー、ちなみにこの中で、ボールクラッシュ経験者は……」

さ、と、特に何の遠慮もなく町垣を含む女たちが手を上げていく。

「やだ、半分以上……みなさん本当に？　一個だけの人はとりあえず下してもらって……やだっ、誰も下ろさない……みんな二個とも？　玉ですよ？　男の人の大事な玉。どうせだからセットで？
ぷっ、案外ポピュラーなんですね、女にとって……キ〇タマ潰しって」

講師が特に意味もなく聞いた質問への前のめりな答えに思わず吹き出す。

聞かれずとも、次々玉潰し談義を始める妊婦たち。

「ホストに売春しろって言われたんで、金的蹴って倒れたところを踏み潰しました」

「あ、やっぱり踏み潰しだよね。すぐ潰れるもん。私も彼氏がしつこく浮気するんで、そのたびに玉踏み潰して」

「それドMだからわざとじゃないの？」

「えー、それなら言ってくれればエッチのたびに潰してあげるのに！」

「フェラの時に玉揉みを喜ぶタイプの人は、玉責めも好きな割合高い気がするんだけど」

「あるある！」

　笑いあう女たちの中で、ふと町垣は軽い気持ちで尋ねる。

「っていうか、クラッシュは半数だけど、蹴ったことある人は……おお！」

　全員があっさり手を挙げるのを見て、半笑いで頭を振る町垣。

「あらあ、まさかこんな……全員がなんて……」

「町垣さん、とんでもない事実を明らかにしちゃったわねえ」

「いやいや、やっぱり皆蹴ってるのねえ」

「女はみんなサッカー選手、男のボールをキックオフ」

　さらに玉責め談議に花を咲かせる妊婦と女性講師。

　そして、盛り上がりの絶頂で講師が言い出す。

「そうだ、皆さん状況的に全員パートナーがいらっしゃるわけで……それじゃ、頭の上でこうやって両手で人差し指を挙げてですね、隙間を使用時の長さにしませんか？　何をとは言いませんが」

「えー」

「ちょっと、そんなことできないよー」

「もうやってるじゃないの！」

「へえ」

「やっぱりアレって、個人差あるのねえ」

「いろいろな長さあるんだ。何の長さかはわからないけどー」

「ナニの長さ」

「ぎゃはは！」

　全員が、別に見栄も張らないし謙遜もせず、パートナーのサイズを指で示す。皆一様両手の人差し指の間で示しているが、片手の人差し指と中指で示せる人間もいれば、肩の幅を超える者もいる。

　お互いの頭を上を見て、顔を赤らめ、笑う女たち。

　モノのサイズは女たちにとっても大いに関心の対象だ。だが同時にどうでもいい物でもあるのは、見栄も謙遜も全くせず、夫のモノを普通に全員が示していることでよくわかる。

　一瞬で、そんな十年以上前の日を思い出した町垣。

　――そうそう。女の子にキンキン怪我させられる男の子が結構いるって話よね。だからこういう場合、ナノ薬用意しておかないと、って話よね。

「ミユコ、そういうことするときには……」

「もちろん、ちゃんと薬は用意してるよ」

「ならいいわ」

「い、いいわっておばちゃん！」

　止めてくれるものと思っていた厳が真っ青になる。それにニコリとほほ笑む町垣。

「厳くん、立派なおチン〇ン付いてるんだから、細かいこと気にしちゃだめよ」

「そ、そんな……」

　娘らはこの数日厳と一緒に風呂に入ったり、長女ときたら厳の初体験の相手にもなっている。

　初体験の話はともかく、風呂で見たモノのことはしっかり母に話している三姉妹である。

　――やっぱりでっかかったお兄ちゃんの息子のムスコは大きいのねえ。ムスコはともかく、おっきいタマタマまた蹴りたくなってきたわ。

　ため息をつく町垣。

　子供らは子供らで勝手に話を進める。

「それじゃ、相撲しようか」

　いって、あっさり手を離すミユコ。

　自由になるや、即座に股間をカバーする厳。

　さ、と股間を押さえる姿に、噴き出す女たち。

「ぎゃはは！　お兄ちゃんタマタマガード！」

「しかたないよ、厳お兄ちゃんは付いてる側だもん」

「だせーわ厳。それにくらべて……あは、私たち、一生あんな恰好しないんだろうなあ」

「ぷぷっ、厳くん気にしないで、あなたたち男の子には、私たち女と違って守るべきものがお股にあるんだから」

言いつつ、目配せし合う女たち。

そして町垣までも一斉に、厳に向かって腰を突き出し、股間の前で指リング二つを作る睾丸しぐさ。

しつつ、声をそろえる。

「「「「タマタマがあるんだから！」」」」

「く、ふうう」

女児の金握り。正直ミユコはほとんど力など込めていなかったのでダメージもないが、厳は恐怖とプレッシャーで消耗していた。

追いうちはきついので、とりあえず股間を両手でカバーし続けるしかない。しつつ、顔を赤らめる。

――く、くそ、こいつら。おばちゃんまで……

「じゃ、相撲ね」

いって、しゃがむというか蹲踞という相撲の構えをとるミユコ。

大股開きで、スパッツの薄布越しに股間の形が見えそうだ。

厳も、仕方ないので同じように構える。同じくスパッツ姿である。

二人の横の真ん中に並ぶ残りの三人の女。

左右を見る。

ミユコの平らな股。

　厳の膨らんだ股間。

「きゃはは！」

「二人とも似たような体格なのに、お股の間は大違い」

「お母さーん、厳お兄ちゃんのお股、何か入れてるの？」

「うふふ、男の子はね、そこに強さのシンボルと弱さのシンボルを一緒に入れてるのよ」

「じゃ、私たち女は？」

「何も入れてないわ。だからここは無敵なの。ま、男の子と比べたら、って話だけどね」

「へー、男の子のお股、弱いんだー」

　全部わかっているくせに、煽るために質問する七歳幼女。

　と、ぶつかり合う男女。

　じっくり見下ろす町垣。

　――ふむ、厳くんは勢いあるわね。やっぱり男の子ね。でも、同じような体格とはいえ、やっぱりこの年だと女のミユコのほうが育ってるわ。なのに……うふ、力で劣るだろう厳くんの方についてるのよね、弱点弱点、おキンキン。男の大事なゴールド！　あと何年かすれば厳くんのほうが体も大きくなるし、仮に体格が同じでも女じゃ骨格や筋肉の強さでは全然勝ち目がなくなる。玉狙いでギリ対抗できるぐらいの戦力差になっちゃう。でも、その圧倒的戦力を覆せる弱点が、力で負けてるだろうこの年代の男の子にも付いてる……正直あの年代が、男と女の戦力差において絶望的に女が勝ってる時期だと思うわ。女、強い、睾丸無し。男、弱い、睾丸あり。という、明らかにバランスを欠いた形。

　ともあれ、相撲なら関係ない。

　本来、ないはずだ。

　スパッツを掴み合う。

　お互い力強く持ち上げる。

　ぎゅううう、と女児の股間にスパッツがめり込む。特に表情も変えないミユコ。

　ぎゅううう、と男児の股間にスパッツがめり込む。あ、と驚き、目を泳がせる厳。

　周りの女たちがその対比に気づいてはしゃぐ。

「ぎゃはは！　お兄ちゃんのアソコ押し潰されちゃう！」

「男の子は大変ねえ」

「ちょ、ちょ、緩めて……おおおおお！」

「ほれほれ」

　スパッツを引き上げ、左右に激しく引っ張るミユコ。スパッツとパンツの布で磨り潰される厳の男の膨らみ。

　厳も必死で同じようにする。

　スパッツを引き上げ、左右に激しく振る。むしろ何もない分余計に減り込み、磨り潰されているミユコの股間。

「きゃー！　擦れる擦れる！　でも、残念でした！」

　笑って厳のスパッツを下にひっぱる。膝を開いているので脱がすことはできない。その気もない。

　引き下げ、勢いよく引き上げる。

「あぐっ！」

　声をあげる厳。周りの幼女らが目を見張る。

「え、なに厳お兄ちゃん？」

「あ、もしかしたら……今の布の動きで……」

「えー？　やだあ、あんなのでもタマタマが？」

「く、このっ！」

　同じことをし返す厳。

　だが、ミユコはむしろ楽しそうだ。

「布でたたかれるー！　でも、残念でした！　ほれほれ！」

「あぐ！　こ、このっ！」

「ぎゃははは！　ほれほれ！」

　お互い、スパッツを下げて、引き上げる競争。

　ニタニタしながら見下ろす町垣。

「まあ、いい勝負ね。ミユコも厳くんも、互角よ互角。同じことしてるんだから、当然互角」

「ぎゃははは！」

「いやおばちゃん！　お兄ちゃんのお股には、付いてるから！」

「そうだよお母さん！　そして私たちには、付いてない！」

「あらあ、そういえばそうだったわね。厳くんたち男の子のお股には、弱々ボールがついている。そして私たち女の子には……そんな弱点ついてなーい！」

　幼女二人がスカートをめくり、町垣はジャージなのでそのまま、自分たちの頑丈な部分をベシベシと勢いよく掌で叩く。

「うぐ、ちょ、やめ……」

「ぎゃははは！　ほれほれ！」

「あぐっ」

　――女の股間の頑丈さを見せ付けられつつ、女に股間を布で叩かれ……これを叩かれているといっていいのか分からないが、とにかく布で攻撃されるという、ほかの場所なら何ともないのに……た、玉だと徐々にダメージが蓄積して……このままじゃじり貧だ！

　厳が動く。

　何とか投げようと体勢を変える。と、その一瞬の隙を突き、腰を突き出すミユコ。

　ボス、と股間と股間がぶつかる。

　ただの事故。お互い同じ衝撃を受けたに過ぎない。

　しかし体の構造の違いによって、片や急所攻撃、片や特に大したダメージはない、と明暗が分かれる。

「あぐっ！　ちょ、おわっ！」

　思わず股間を押さえようと手を離したところで、あっさり投げ倒される。

「よしっ！」

「勝者ミユ姉！」

「ミユコお姉ちゃんおめでとう！」

「く、くふううう」

「残念だったわね、厳くん」

「くふううう、ちょ、ちょ、まてよ……」

　何とか半身を起こす厳。投げられた衝撃より、ギリギリルール内で執拗に繰り返された金的のダメージのほうが大きい。

　股間を押さえつつ、ミユコを見上げる。

「最後のアレ、明らかにわざとだろ？」

「事故だよ事故。男らしく負けを認めなさいよ。キ〇タマついてんでしょ？　ぷっ」

　急所痛を感じている今以上に、付いていることを確信できる状況もないだろうと思うとつい笑ってしまうミユコ。

　顔を赤くしつつ、舌打ちする厳。

「ちっ、言い逃れされたら仕方ねえわ。まあ、お前が相撲強いのは当然かもな」

「ん？　どういうこと？」

「だから、デブってことだよ……あ」

　ミユコは胸など全くなく、太ももや尻の肉付きはいい、腹は胸より出ている、という女児らしい角のない体型。が、それは太っているのとは全く違う。女児の平均的な体型でしかない。

　が、仮に本当に太っていようが、太っていまいが、関係ない。

　怒るというか呆れて半眼になって、周りの女たちを見回す。

「二人とも、女として今の発言許せる？」

「いくらお兄ちゃんでも許せなーい」

「厳お兄ちゃんひどいよ、私も許せないよー」

「でしょでしょ？　それじゃ、二人ともそこの腐れおキンキンくん押さえて」

「あ、ちょ」

「きゃー！」

「押さえろ押さえろ！」

　幼女二人が突然襲い掛かってくる。座っていた状態で、再び押されて仰向けに。上半身に幼女二人がのしかかる。幼女二人とは別に、足を掴まれる感覚。

　引っ張られる。

　そして開かされると、キュッと肉玉が引き締まる。女でも、足を開かされる場合、恐怖はあるだろう。

　だが、物理的な危害への恐怖はないはずだ。

　男の場合は、足を開かされるということはとびぬけて弱い部分が無防備にされることを意味する。

「やめ、あっ」

　ギュム、と股間に柔らかい物が乗せられるのを感じる。

　幼女二人が、少し動き、見えるようにしてくれる。

　満面の笑みを浮かべたミユコを。

　絶対急所を足の下に収め、勝利と、相手の儚い弱さを確信して文字通り見下してくる女児を。

「うふふ、電気あんまは、女にゃお遊び、男にゃ拷問」

「ま、まって！　デブって言ったこと謝るから！　お、おばちゃん止めて！」

「電気あんまぐらいで大げさな。おばちゃんならそんなもん、全然平気だぞ？」

「そりゃ玉無しクソマ〇コなら効かないだろうよ！？」

「え？」

　唯一助けられる人間への暴言に驚く女児や幼女たち。

　町垣は顔だけ笑って肩をすくめる。

「へー、厳くん態度でっかーい。さすがに……」

　しゃがみ、スパッツを引っ張り中を覗く。甥っ子の男のモノは年齢に見合わず、折り曲げられて入っているなかなかのサイズである――折るといっても血行の問題があるので、緩いカーブでUの字といったところだが。

「チン〇ンでっかいだけはありますなあ」

　――いやん、マジで大きいわあ。お兄ちゃんがこの年の時はどのぐらいだっけ？　同じぐらいかな？　うーんご立派な一族。うちにも息子がいたら、ムスコ立派だったのかしらね？

　まじまじ見る年上女に、顔を真っ赤にする厳。

「み、見てんじゃねえよババア！」

「あっはー、言ってくれるわねえ。ミユコ、キ〇タマ潰しちゃいなさい」

「はーい！」

「はーいじゃねえよクソマ〇コ！」

「ほれ、キーン！」

　少し足を上げ、ポムっと軽く踏むミユコ。

「あがあああ！」

　腰を跳ね上げる厳。

「ちょ、今のでその反応！？　ぎゃははは！　大げさ大げさ、ほれほれ、タマタマ振動振動」

「おおおおおお！」

　ガガガ、と厳の股間を激しく揺らす。膝の動きが巧みで、よほど電気あんまに慣れているのが伺える。

「あぐあああああ！」

「ほーれほれほれ、ゴールド！　ゴールドシェイクで玉ミンチ！」

　目を血走らせ、涎を垂らしながら電気あんまの女児。先の楽しみなドＳ女子である。

　周りの幼女もにっこにこで、自分たちにない部分を責められている男の反応を楽しんでいた。

　思いきり蹴とばしているとかなら、かわいそうだからと二人は止めに入るだろう。

　だが、ミユコがやっているのは本当に足を激しく振動させているだけなのだ。

　幼女二人にとって、自分なら何ともない程度の行動。自分が男ならダメージを受けるのだろうことはわかるが、やはり実感できないだけに同情も難しかった。明らかに大した力がこもっていないという事実のほうがはっきりとわかる。

　だから、楽しく反応を見ていられる。

「ふんぐおおおおおお！　玉が玉がタマタマあああああああああ！」

　暴れる厳。手をばたつかせようとする、が、幼女二人にしっかり押さえられる。

「はいはい、大人しくしてね」

「お兄ちゃん力全然はいってなーい、タマタマダメージで弱々状態だねー」

　女三人に寄ってたかって抑え込まれ、数の力で電気あんま。この部屋の五人の中で、唯一自分だけ

が持っている絶対急所、睾丸を振動で責められる。

　唾を飛ばし、のたうつ厳。

　四人を満足げに見ていた町垣、一つ頷き口を開く。

「それじゃ、私もう行くからね」

「はーい」

「おぐおおおおお！」

　幼女二人に抑え込まれ、女児に電気あんまで玉潰しを食らう。

　それを見ていた叔母は止めるどころか煽ってから去っていく。

　――や、やっぱりだめだ、女はだめだ、玉のヤバさが全然わからねえ。痛みが分からないから結局のところ、ナノ薬で治るんだからいいっしょ、って結論になる。こいつらと遊んでたら身が持たねえ、これから暫くは男連中と遊ぼう。そういえば、神社にお化けが出るとかクソしょうもないこと言ってたな……

　割と冷静な厳。

　絶叫しつつも、金的に慣れたミユコは男ならダメージが出るが、女なら平気な程度のあんましかしていない。

　それなら男も、泡を吹いて気絶、などということにはならない。

「ふ、ふんぐううううう」

　とはいえ、攻撃が終わるや股間を押さえて丸まり、しばらく動けない程度にはなる。

　ミユコが疲れて手を離し、あんまをやめると幼女らも立ち上がる。

　丸まった厳を見下ろし、腰に手をやりニタニタと楽し気なドＳ女児。

「あはは、痛い？　キ〇タマ痛い？」

　横向きにまるまる厳。

　頬を赤らめ、メス顔で見下ろすミユコ。

「全然わからないわー。っていうか、わかりたくねー！　あー、玉なくてよかった！　ね？」

「だよね、だよねー！」

「お兄ちゃんも、お姉ちゃんならこういうことにならないのにね」

「ざ、ざけんな、女なんて絶対いや……あ、嘘嘘！」

　今度は上半身にミユコがのしかかり、体を開かせる。

「ほれ、二人とも、足開いて」

「はーい！」

「こんな感じかな」

「真ん中に立って。一人が足一本、そうそう」

　幼女が二人足の間に立った時点でもう閉じるのは無理だ。

　上半身は女児が抑え込む。

　またも、股間が無防備。

「ま、まて、俺、もう……玉だけは許して！　あぐあああ！」

　ベシ、と割とまだ姉たちと違ってうまく加減できないアイミの足の甲が厳の股間のふくらみを押し潰す。

　従兄の絶叫を聞き、少し首を傾げるミユコ。

「んー、アイミ、今のはちょっときついかな。もうちょっと弱くても男は耐えられないから。ミキナ、軽くしてあげて」

「はーい、それじゃ……潰れろ！」

「ぐむっ！」

　叫びは全力で蹴りに行っていそうな感じだが、ミキナはちゃんと加減していた。金的経験では従姉のアイミに遠く及ばないが、金的の才能があるのかもはや加減は彼女のほうがうまい位だ。

　悶える兄を見下ろし、熱い息を吐く。

　――うわ、あの強いお兄ちゃんが、私の軽い蹴りでこんなに……ああ、タマタマ弱い。男の子弱い。女でよかった。ああ、なんか、付いてないところが熱い気がする……

　金的の才能、というよりドＳの度合いが強いのかもしれない。

「ほれ、次はもういっちょアイミ」

「はーい！　でも、いま苦しそうだから、ちょっと待ってあげようか？」

「マジ！？　ありが……あがっ！」

　ペン、幼女の足の甲が肉玉を蹴り上げる。全身を硬直させ、目を剥く厳。

　爆笑する女たち。

「はい、ウッソー！　ぎゃはは！」

「ゲラゲラゲラゲラゲラゲラゲラゲラ！」

「くむうううううう！」

　冷静に考えればなぜ先ほどの流れで金的祭りになるのか。

　多少女性蔑視的な発言はあったが、不自然な流れといえる。

　結局のところ、ドＳ女児たちが「金責めしたい」と思っているから、些細な言葉尻をうまく利用して欲望を満たすのに利用しているという事だろう。

　それは何もこの場だけではない、従妹たちが来て、この離れが男一人と女四人の偏った男女比になってからのここ数日ずっとという気がする厳。

　男女が同数ならバランスもとれるのでまだましだ。

　しかし女四人に対し、男一人では文字通りたまらない。

　が、とりあえず今は身動きできず、女たちが飽きるのを待つしかない厳。

　離れに金的絶叫が響き続ける。

　母屋や敷地外まで距離があるので、特に誰かが聞きとがめて止めに来ることもない。

体験版終わり

この後厳は金責めから逃げ、外に遊びに行って更なる金責めの中に飛び込んでいきます

続きは製品版でぜひお楽しみください